Journal of International Society of Life Information Science (ISLIS)
J. Intl. Soc. Life Info. Sci. *Vol.32, No.1, March 2014*
The 37th Symposium on Life Information Science
March 15-16, 2014, Toho University Omori Medical Center, Tokyo, Japan

津波と原発の子どもたちの時間的展望への影響

—東日本大震災後の作文のテキストマイニング—

(Effects of Tsunami and Nuclear Disaster on Children's Time Perspective -A Text Mining Study of Essays after the Great East Japan Earthquake -)

いとう たけひこ
(Takehiko ITO)
和光大学　心理教育学科（日本、東京）

要旨：【目的】本研究の目的は、東日本大震災を経験した子どもたちの作文から、子どもたちの語りの特徴を明らかにし、津波体験と原発被害体験の違いによりどのような願望の違いが見られるかを明らかにすることである。【方法】分析対象は4冊の本に掲載された 161 編の作文。【結果】津波被害が有る子どもたちは「この震災を忘れたくない」、「この震災のことを伝えていきたい」と述べている。原発被害にあった子どもは、「もとの生活にもどりたい」、「早くもとのような町にもどってほしい」思いと、原発被害のため避難生活を続ける中、離れ離れになった「友だちに会いたい」、「遊びたい」という現在の願望が述べられていた。【考察】津波被害の子どもたちは被害を過去のものと受け止めているが、原発被害体験の子どもたちにとって作文時点での被害は現在進行形だった。

キーワード：地震・津波・原発・テキストマイニング・時間的展望

1. 問　題

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、地震と津波さらには原子力発電所の人災とも言えるトラブルが重なる未曾有の震災であった。この震災は日本のみならず、世界中に大きな衝撃を与え、様々な問題を提起するきっかけとなったことは言うまでもない。この震災では、福島第一原子力発電所の放射能漏れ被害の深刻さが取り分け大規模なものであったと言える。放射能漏れにより、故郷を奪われ避難せざるを得ない人も多く、この問題は復興の大きな足枷となっている。放射能被害は今後何十年にもわたり私たちの健康に害を及ぼし続けるものであるため、被害を受けた人々の身体的、精神的負担は大きい。本研究では、Ito & Iijima[1] に引き続き放射能被害の特徴を津波被害と対比させることにより子どもたちの作文にどのような時間的展望[2] の違いが見られるかを通して、被害の特徴を明らかにしたい。

2. 目　的

本研究の目的は、東日本大震災を経験した子どもたちの作文から、子どもたちの語りの特徴を明らかにし、津波体験と原発被害体験の違いによりどのような願望の差が見られるかを明らかにすることにより時間的展望の対比をすることである。

3. 方　法

分析対象：4 冊の本、1) 森健(2012)『つなみ　被災地の子どもたちの作文集　完全版』文藝春秋(85 編)、2) 森健 (2011)『「つなみ」の子どもたち　作文に書かれなかった物語』文藝春秋(4 編)、3) Create Media(2012)『子どもたちの 3.11』学事出版(44 編)、4) ふくしま子ども未来プロジェクト(2012)『はやく、家にかえりたい。』合同出版(36 編)、から選ばれた小中高校生の 161 編の作文を分析対象とした。

手続き：原文をテキスト化し、Text Mining Studio Ver.4.1(Mathematical System Inc.)により、願望の動詞を抽出した。津波体験の有無と原発被害体験の有無により、対象作文を 4 群に分類して、対応分析を行った

4. 倫理的配慮

公表・市販されている書籍の内容を用いた分析であるため、著作権に配慮する他は特に必要がない。

伊藤武彦. 195-8585　東京都町田市金井町 2160 番地
和光大学　現代人間学部　心理教育学科.　take@wako.ac.jp

Journal of International Society of Life Information Science (ISLIS)
J. Intl. Soc. Life Info. Sci. *Vol.32, No.1, March 2014*
The 37th Symposium on Life Information Science
March 15-16, 2014, Toho University Omori Medical Center, Tokyo, Japan

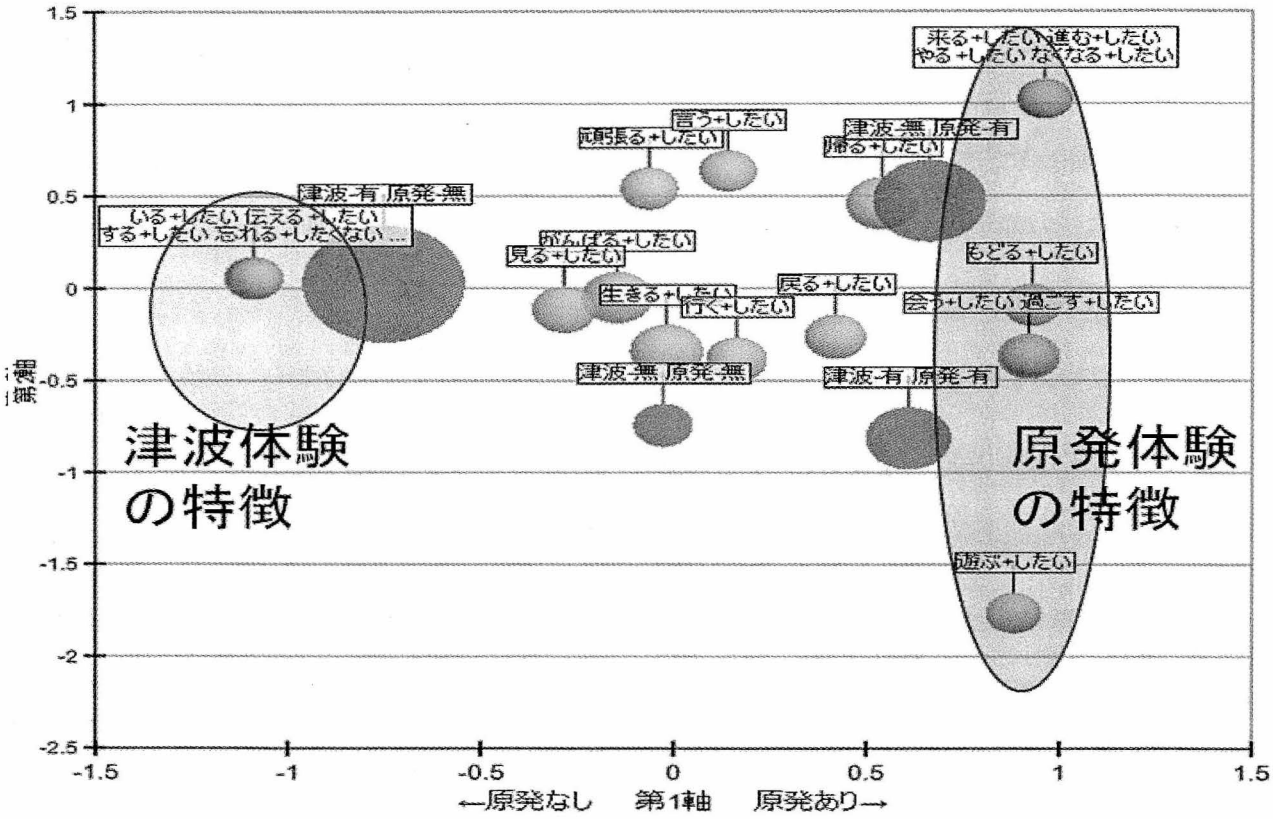

Fig 1. 原発体験と津波体験の有無による願望表現（動詞）の対応分析

5. 結　果

原発体験と津波体験の有無による4群を比較した対応分析（Fig. 1）の結果、津波被害が有り、原発被害が無い群（Fig. 1 の左側）では、「この震災を忘れたくない」、「この震災のことを伝えていきたい」ということを述べていた。津波被害の有無にかかわらず原発被害が有る群（Fig. 1 の右側）では、地元や家に帰りたい思いや、「もとの生活にもどりたい」、「早くもとのような町にもどってほしい」思いなど現在の生活の制約から生活を回復したい願望や、原発被害のため避難生活を続ける中、離れ離れになった「友だちに会いたい」、「遊びたい」という大事な人間関係を取り戻したい思いが特徴的であった。津波被害も原発被害も経験していない群（Fig. 1 の中央）「頑張りたい」、「生きたい」などの表現が特徴的であった。

6. 考　察

震災による津波体験と原発体験により子どもたちの生活が一変した。何十年、何百年のオーダーで起きる津波体験は未来に引き継ぐ過去のできごととととらえられている。これに対して、慣れ親しんだ環境を離れ避難生活をしなければならない現実や家族や友人と離れ離れになり生活をしなければならない現実など、放射能被害で生活の制約を余儀なくされた子どもたちは、過去からの被害が現在の生活にも継続し、現在進行中であり心配が未来にも及ぶことが明らかになった。

文　献

1) Ito, T., & Iijima, Y.: Posttraumatic growth in essays by children affected by the March 11 Earthquake Disaster in Japan: A text mining study. *Journal of International Society of Life Information Science*, 31, 67-72, 2013.
2) 都筑学・白井利明: 時間的展望研究ガイドブック. 京都：ナカニシヤ出版, 2007.